武蔵野日曜聖書講筵

天国とは
――マタイ伝第13章――

１９９３年11月14日
小池辰雄

福音の種　翻りて　良き地　終末的現在　絶対的な境地　何がどうなったって　天翔ける　聖書を歩く　聖書が第一　百年たって

【マタイ13】

1その日イエス家を出でて、海辺に坐したもう。2大なる群衆みもとに集りたれば、イエスは舟に乗りて坐したまい、群衆はみな岸に立てり、3譬にて数多のことを語りて言いたもう、『視よ、種播く者まかんとて出づ。4播くとき路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。5土うすき磽地に落ちし種あり、土深からぬによりて速かに萌え出でたれど、6日の昇りし時やけて根なき故に枯る。7茨の地に落ちし種あり、茨そだちて之を塞ぐ。8良き地に落ちし種あり、或は百倍、或は六十倍、或は三十倍の実を結べり、9耳ある者は聴くべし』10弟子たち御許に来りて言う『なにゆえ譬にて彼らに語り給うか』11答えて言い給う『なんじらは天国の奥義を知ることを許されたれど、彼らは許されず。12それ誰にても、有てる人は与えられて愈々豊かならん。されど有たぬ人は、その有てる物をも取らるべし。13この故に彼らには譬にて語る、これ彼らは見ゆれども見ず、聞こゆれども聴かず、また悟らぬ故なり。14斯てイザヤの預言は、彼らの上に成就す。曰く、「なんじら聞きて聞けども悟らず、見て見れども認めず。15此の民の心は鈍く、耳は聞くに懶く、目は閉じたればなり。これ目にて見、耳にて聴き、心にて悟り、翻りて、我に医さるる事なからん為なり」16されど汝らの目、なんじらの耳は、見るゆえに、聞くゆえに、幸福なり。17誠に汝らに告ぐ、多くの預言者・義人は、汝らが見る所を見んとせしが見ず、なんじらが聞く所を聞かんとせしが聞かざりしなり。18然れば汝ら種播く者の譬を聴け。19誰にても天国の言をききて悟らぬときは、悪しき者きたりて、其の心に播かれたるものを奪う。路の傍らに播かれしとは斯る人なり。20磽地に播かれしとは、御言をききて、直ちに喜び受くれども、21己に根なければ暫し耐うるのみにて、御言のために艱難、あるいは迫害の起るときは、直ちに躓くものなり。22茨の中に播かれしとは、

御言をきけども、世の心労と財貨の惑いとに、御言を塞がれて実らぬものなり。23良き地に播かれしとは、御言をききて悟り、実を結びて、或は百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍に至るものなり』……

44天国は畑に隠れたる宝のごとし。人、見出さば之を隠しおきて、喜びゆき、有てる物をことごとく売りて其の畑を買うなり。45また天国は良き真珠を求むる商人のごとし。46価たかき真珠、一つを見出さば、往きて有てる物をことごとく売りて、之を買うなり。

47また天国は海におろして、各様のものを集むる網のごとし。48充つれば岸にひきあげ、坐して良きものを器に入れ、悪しきものを棄つるなり。49世の終にも斯くあるべし、御使等いでて、義人の中より、悪人を分ちて、50之を火の炉に投げ入るべし。其処にて哀哭・切歯することあらん。……

54己が郷にいたり、会堂にて教え給えば、人々おどろきて言う『この人はこの智慧と此等の能力とを何処より得しぞ。55これ木匠の子にあらずや、其の母はマリヤ、其の兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダにあらずや。56又その姉妹も皆われらと共におるに非ずや。然るに此等のすべての事は何処より得しぞ』。57遂に人々かれに躓けり。イエス彼らに言いたもう『預言者はおのが郷、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』58彼らの不信仰によりて、其処にては多くの能力ある業を為し給わざりき。

●福音の種

今日は「天国とは」という題ですが、マタイ伝では大体「天国」という言い方です。ルカ伝の方は「神の国」という。天国のことは、マタイ伝では5章に大分書いてある。

「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」（マタイ5・3）

これは有名な御言です。

「恵福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

という。この「天国」という字は複数ですけれども。

では、マタイ伝13章に入ります。

1その日イエス家を出でて、海辺に坐したもう。2大なる群衆みもとに集りたれば、イエスは舟に乗りて坐したまい、群衆はみな岸に立てり、3譬にて数多のことを語りて言いたもう、『視よ、種播く者まかんとて出づ。4播くとき路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。5土うすき磽地に落ちし種あり、土深からぬによりて速かに萌え出でたれど、6日の昇りし時やけて根なき故に枯る。7茨の地に落ちし種あり、茨そだちて之を塞ぐ。8良き地に落ちし種あり、或は百倍、或は六十倍、或は三十倍の実を結べり、

「種播く者」というのはもちろん単数で、キリストご自身のことを譬えで言ってらっしゃる。
「福音の種を播いてもこんなわけだ」
というわけです。

9 耳ある者は聴くべし』

「耳ある者は聴くべし、目ある者は見るべし」
とはなかなか含みのある御言です。目があっても見る目がないし、目あきめくらという。耳があっても本当に聞かない。孔子の言葉にもありますけれども。

10 弟子たち御許に来りて言う『なにゆえ譬にて彼らに語り給うか』11 答えて言い給う『なんじらは天国の奥義を知ることを許されたれど、彼らは許されず。12 それ誰にても、有てる人は与えられて愈々豊かならん。されど有たぬ人は、その有てる物をも取らるべし。

これは妙なことをおっしゃるわけです。この譬えの話は25章にも出ています。ご自分で後で解説しておられます。

13 この故に彼らには譬にて語る、これ彼らは見ゆれども見ず、聞こゆれども聴かず、また悟らぬ故なり。14 斯てイザヤの預言は、彼らの上に成就す。曰く、「なんじら聞きて聞けども悟らず、見て見れども認めず。15 此の民の心は鈍く、耳は聞くに懶く、目は閉じたればなり。これ目にて見、耳にて聴き、心にて悟り、翻りて、我に医さるる事なからん為なり」

「鈍い」ばかりでなくて、頑なんです。ユダヤ人がキリストの言を聞いても、さっぱりこれを受けとらない。これは正にイザヤの言葉の通りです。キリストの言を本当に受けとったのはごく僅かの弟子たちです。
「民衆は聞くのだけれども、またそれをすぐ忘れてしまうし、本当の意味をもって受けとっていない」
というわけです。なにもあの当時に限らず、今でも同じことです。

●翻りて

「これ目にて見、耳にて聴き、心にて悟り、翻りて、我に医さるる事なからん為なり」

「そういうことは結局、しない」
というのがイザヤの預言なんです。ここに「翻りて」という言葉がありますが、この「ひるがえる」ということが非常に大事な言葉です。
「心を翻さなければダメだ」
と、エレミヤの中にも書いてあります。我々の生まれつきの心ではダメで、翻らないと、ひっくり返らないとダメなんです。

15 此の民の心は鈍く、耳は聞くに懶く、目は閉じたればなり。これ目にて見、
耳にて聴き、心にて悟り、翻りて、我に医さるる事なからん為なり」16 され
ど汝らの目、なんじらの耳は、見るゆえに、聞くゆえに、幸福なり。17 誠に
汝らに告ぐ、多くの預言者・義人は、汝らが見る所を見んとせしが見ず、な
んじらが聞く所を聞かんとせしが聞かざりしなり。

キリストが来なければ、それはダメだった。預言者も一歩手前だ、と。

18 然れば汝ら種播く者の譬を聴け。19 誰にても天国の言をききて悟らぬときは、
悪しき者きたりて、其の心に播かれたるものを奪う。路の傍らに播かれしと
は斯る人なり。

「悪しき者」とはサタンのことです。

20 磽地に播かれしとは、御言をききて、直ちに喜び受くれども、21 己に根なけ
れば暫し耐うるのみにて、御言のために艱難、あるいは迫害の起こるときは、
直ちに躓くものなり。

これはダメだと。

運命の上でいろいろな事にでっくわすわけです。艱難だとか、迫害だとか。そうすると、

22 茨の中に播かれしとは、御言をきけども、世の心労と財貨の惑いとに、
御言を塞がれて実らぬものなり。

非常にこの例は多いわけです。心労とこの世の財宝でもって心が動いてしまう。この福音が、神の言が、他のものとは比較にならない大事なものだ、ということの自覚がないと、みなこういうことになってしまう。それはみな滅びに向かう。

●良き地

23 良き地に播かれしとは、御言をききて悟り、実を結びて、或は百倍、ある
いは六十倍、あるいは三十倍に至るものなり』

「良き地」というのは、人間でいえば、魂の砕けている世界です。無の魂です。良きも悪しきもない、本当の無の世界。それは砕けで無にされている。というのは、キリストの砕けをいただいている。十字架の贖いのことです。十字架の贖いで砕けたる魂となる。人間の魂がただ砕けたって、そんなものは一時的でまたダメになる。詩篇51篇にありますけれども。本当の砕けというのは、キリストからたまわりたるものです。キリストから賜っていなければ、本当の砕けにならない。

「我々のために砕かれた」

という、イザヤ書53章の言から来ている。キリストの恵みは、十字架の事態は、我々のために砕く。それは我々の自我を砕いてくださっている。自我は十字架において砕かれてある。それが「良き地」なんだ。

だから、キリストのこの譬えは、本当にキリストの福音の角度から受けとらないと、

「何だろう、この良き地とは。生まれつき良き人はいいけれども、そういうように恵まれていない者は困るではないか」

なんていうことになる。この「良き地」というのはそういう意味ではない。

「キリストの砕けをたまわっている」

のが本当の「良き地」です。この場合の「良き」とはいわゆる相対的な善悪ではない。相対的な「良き、悪しき」ではとてもダメです。キリストに砕かれて非常に楽になっている、そういう所が「良き地」です。

キリストが、ヨハネ伝で、

「なぜ、私のことを善いというか。神さまの他に善いものはあるか」

と言われた。ですから、ああいう絶対的な「善き」という意識はキリスト自身はお持ちにならない。

「神の他に善きものなし」

という。だから、「良き地」というのは賜りたる世界でなければダメなんです。この「良き」は善悪の相対的な善ではない。この譬えからいうと、何か相対的ぎみに響きますけれども、もうひとつ深く読めばそういうことです。

とにかく、相対の世界ではすべて結局ダメなんです。美醜とか、善悪とか、賢愚だとか、みな相対的な世界でしょ。それをもうひとつ突き抜けないとね。福音の世界はそういう相対の世界ではなく、絶対の世界です。

だから、どういう環境であろうと、どういう状態にあろうと、周囲の状況によって動かされない。それは本当の天国人なんだ。我々自身が天国人となっていなかったならば、どんなに状況がよくてもダメ。状況の良し悪しにかかわらず、それらの運命に支配されない世界は、自分自身が天国人にならなければダメです。

●終末的現在

讃美歌228番「ガリラヤの風」の1節に、

「ガリラヤの風かおるあたり
『あまつ御国は近づけり』と
のたまいてよりいく千歳(ちとせ)ぞ
来(きた)らせたまえ、主よ、み国を」

とある。あれは「来らせたまえ」ではダメです。

「天国は、神の国は汝らのうちにあり」

とキリストが言われた。「天国」でも「神の国」でもどっちでもいいですが、それは神国人、神の国の人です。我々自身が、環境の如何にかかわらず、運命の如何にかかわらず、生ま

れつきの如何にかかわらず、天国人・神国人に絶対恩寵の世界でならなければ。それを受けとっていかないとダメです。

だから、キリストの譬話（たとえばなし）では実は本当のことが言われていない。本当は、

「お前自身が天国となれ」

ということなんです。「来（きた）らせたまえ」ではない。来ているんです。

「来らせたまえ、御国を」

という、「御国」は終末の国なら分かりますよ、歴史の最後の終末の国なら。そうじゃない。

「終末的な神の国を、この現在において終末を、神の国を持っていなければダメ」

なんです。それを終末的現在という。

「『来らせたまえ、御国を』ではない。もう、お前の中に御国が来ているではないか」

とキリストに言われる。

とにかく、福音の世界は全部、現実です。現実であり、現在である。いわゆる願望ではない。願望していると、終いにくたびれてしまう。与えられたる希望ならいいですよ、上から来ている希望なら。終末の世界から来ている希望は、これは本当に成就する希望ですけれども、ただ願望では、人間の側の願望ではダメです。

「辺（あた）りが荒れ地であろうが、茨があろうが、何があったって大丈夫です」

というもの凄い世界です。このキリストがおっしゃっているのは、まだ少し相対の世界です。

「お前は絶対の境地に入れ」

ということ。イエスはそこに居られるんだ。

我々自身が天国人になっていなければ。天国とは望まれる世界ではない。願望される世界ではない。キリストが、

「我（キリスト）を持て」

とおっしゃる。キリストをいただけば、そこが天国です。

●絶対的な境地

「恵福（さいわい）なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」（マタイ5・3）

これは素晴らしい言です。

「恵まれたるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものである」

とは、

「その人は天国人である」

ということです。霊が貧しいのが本当の天国人なんです。マタイ伝5章3節は福音の鍵みたいな言だ。その後は

「恵福（さいわい）なるかな、悲しむ者……

恵福なるかな、柔和なる者……

恵福なるかな、義に飢え渇く者……
恵福なるかな、憐憫（あわれみ）ある者……
恵福なるかな、心の清き者……
恵福なるかな、平安ならしむる者……
恵福なるかな、義のために責められたる者……」

と、並べてある。このキリストの分類は素晴らしい。

「**喜べ、喜べ、天にて汝らの報いは大（おおい）なり**」

とは本当は、

「喜べ、喜べ、既に汝らは天国的な報いを受けているぞ」

ということだ。「終末の報い」のことをキリストは言ってらっしゃるけれども、終末的な現在を実は今いただいているんです。どんな環境にあっても、どんな運命にあっても、いつも微笑んでいるような笑っているような、そういう魂。

「何でもござれ、どうにでもなれ」

と。そういう絶対的な境地を持たないと、つまらんです。人にどう思われようと、どう判断されようと一向差し支えない。これが天国を持っている人です。そういう人は、百万人といえどもこの人にはかなわない。あなた方一人びとりがそういう天国人に無条件になれる。無条件の世界だから。それは要するに、

「天国人そのものたるキリストを受けとる」

と、そういうことになる。キリストを受けとらなければダメです。

●何がどうなったって

「我とキリストとは一つなり」

ということ。

「**我と父とは一つなり**」

とキリストが言われたが、我々はキリストの恵みでもって、

「私はキリストと一つです」

と、楽しんで、皆さん一人びとりが告白できる。それでいい。もうその他は問題なし。

「私はもうキリストと一つですから、何がどうなったっていいんですよ」

と言える。そういう人からは、人の見えない光が発している。そして人を暖める、明るくする。闇の世界を明るくしてしまう、光の世界に変えてしまう。私が今日言う

「天国とは」

というのは、そういうことです。それが本当の天国です。

マタイ伝5章3節はそういう意味で非常に大事です。

「心の貧しき者」

とは霊が貧しくされたる者。キリストの十字架で霊が貧しくされる。霊が貧しくなると、ゼロになると、これが無限大なんです。ゼロ＝無限大。

「霊が貧しくされていると、そこに聖霊がやってくる」

ということ。聖霊は無限。本当に十字架を受けとれば聖霊が来ざるを得ない。十字架と聖霊をバラバラにしているからダメなんです。十字架の土台には、本当に十字架を受けとっていれば、必ず聖霊はくる。キリストが、

「我が受くべきものがある」

と言ったのは十字架のことです。

「そうしたら、お前たちに本当のものをやるぞ」

とは、聖霊のことです。後でみな使徒たちが復活のキリストにひっくり返された、翻らされた。パウロなんかもそれの最たる者だ。

本当の悲しみ、本当の柔和、本当の義、本当の憫(あわれ)み――ここにキリストがいろいろ言っていらっしゃるけれども――みなそれが本ものになってくる。

「喜び喜べ、最後の日には、天にて汝らの報いは大いなり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。」

「けれども、預言者よりももっと素晴らしいものをお前たちは受けとった」

と後の方で書いてある。

「報いは大いなり」

というけれども、終末的な報いの前にもう既に来ている。そういったような状態は本当に報いられている状態です。地上において天国を現じている人が天国人です。

●天翔ける

私が作った讃美歌「わが道伴れ」（召団讃歌A1）の４節に、

「わが道伴(みちづ)れ　わが情け
旅路の峠を　幾度(いくた)びも
越えに越えん　天翔(あまか)ける日まで」

というのがある。「天翔(あまか)ける」とは素晴らしい言葉だ。「往生」という言葉は好きだけれども、この「天翔」という言葉は往生以上だ。我々は地上から次の世界に行くときには、天界に翔け昇っていく。あなた方は絶対に「死ぬ」という言葉は使わないでください。

「私は死にません」

と言わなくては。

「私は死にません、天翔(あまか)けりますよ」

と。そういう烈々たる魂で進んでいきましょう。

そういう世界は非常に清くもあるし、非常に柔和でもあるし、義でもあるし、愛でもあるし、

本当の悲しみを知るし、こういう天国人の中には何でもみな入ってしまう。内容が素晴らしくて、概念規定ができない。地の塩でもあり、世の光でもある。

キリストというのは内容が無限無量のひとだ。概念的に限定できるような世界は大したことはない。定義付け、概念規定のできるものはみな大したことはない。本ものは無限定の世界です。

「雄弁は銀にして、沈黙は金なり」

というが、「沈黙」というのは、ただ黙るのではなくて、

「もうとても表現できない」

ということです。とても表現できないというのがこの沈黙の世界です。

ゲーテの『ファウスト』の一番終りの方に出てくる「神秘の合唱」というのは素晴らしい言葉だ。さすがはゲーテだ。

「名状しがたきものが
ここに実現している。
到達し得ざるものが
ここで事実となっている。
表現し得ざるものが
ここでは成されている。
永遠に女性的なるものが
我を引き上げていく。」

その後に私は、

「愛と喜びをもって
神聖なる太陽へ。」

という二句を付け加えた。

「神聖なる太陽」

とは神さまのことです。

「永遠に女性的なるもの」

というのは、従順な温和な世界でしょうね。それが我々を引き上げていく、

「愛と喜びをもって神聖なる太陽へ」

と。私たちはみ霊の力で不思議なことが生じていく。十字架・聖霊の世界はありがたい。十字架・聖霊を本当に身につけたら、あなた方がなさることは不思議なことがどんどん進んでいく。楽しくてしょうがない。

●聖書を歩く

私はいわゆるお説教だとか、いわゆる解釈だとかは嫌いだ。キリストのみ言を受けとっ

ていくと、告白となってくる。あなた方も同じようにして聞いていらっしゃると思いますけれども。

22 **茨の中に播かれしとは、御言をきけども、世の心労と財貨の惑いとに、御言を塞がれて実らぬものなり。**

人間だから相対的な面もあるさ。あるけれども、それに支配されなくなる。

「この世の心煩いだの、宝だの、何のかんのと、人の批評だとか、どうでもいい」

という世界に入ってしまわないとね。聖言が生きていると、

23 **良き地に播かれしとは、御言をききて悟り、実を結びて、或は百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍に至るものなり』**

と、そのとおりです。そういう天国人になっていれば、あなた方は知らないまに本当の伝道ができるわけです。私は

「キリスト教」

という言葉は嫌いだ。教えではない。キリスト教というと、みんな教えだと思っている。キリスト道です。

「我は道なり」

とキリストは言われた。実際、我々は自分で歩かなければダメなんだ。教えを頭でもって受けとるようなものではない。キリスト道、どこまでも道です。仏教も仏の教えではない。仏道です。実際に歩かなければダメ。教えなんてものはいくら受けとったってダメです。

だから、教育なんていう言葉はよくない。教えて育てるではない。道育という言葉はないけれども、本当は道育なんだ。教師という言葉もよくない。道師だ。道の師なんだ。

本当は、素人の中に専門家以上の人がいる。キリストは本当の素人です。預言者でも祭司でもない。それが本ものなんです。いわゆる玄人はダメ。「素人」とはいい言葉だ。

「論語読みの論語知らず」

というのがそうです。

「本当の論語の読み方はそうじゃない」

ということ。研究そのものを私は否定しているのではない。一つの手段としての研究も結構ですが、研究のためのような研究をしていたのでは、いつまでたってもダメです。研究ではものの本質がつかめない。聖書研究ではダメなんです、聖書身読でないと。身体で現実に読まないと。現読でないと。「聖書を歩く」と言ったらいいかも知れない。

「聖書を読むのではなくて、私は聖書を歩いていますよ」

と。現実に生活をもって歩いていなければ聖書はつかめない。聖書研究会なんていくらやったってダメなんだ、ご苦労さんなはなしだ。

まぁ、そんな気合でいきましょう。あなた方、聞いていて楽しいですか。楽しくなければつまらないよ。私はしゃべっていて楽しいのだから、楽しんで聞いてください。しかめっ

つらで言っているのではないから。

●聖書が第一

また、キリストは言ってらっしゃる。

44天国は畑に隠れたる宝のごとし。人、見出さば之を隠しおきて、喜びゆき、有てる物をことごとく売りて其の畑を買うなり。

「有てる物をことごとく売りて」

ということは、

「他のものは一切問題にしない」

ということです。売るの売らないのはどうだっていい。

「他のものは一切問題にしないで、この宝だ、この福音だ。万巻の書はあるけれども、ただ新約聖書という一書、こればかりは何ものとも比較ができない」

と。新約聖書をそれだけの気持をもって読む。ゲーテもそのようなことを言っていた、

「万巻の書があるけれども、この聖書一巻にはかなわない」

と。ゲーテという人は聖書を研究しない。本当に身読した人です。彼の文学の中にはそれが溶け込んでいる。だから、凄い大詩人になる。ゲーテが大詩人であるのは、実は根底には聖書が生きていたからです。

トルストイもかなりそうだ。ドストエフスキーも凄い人だ。やはりロシアでなければあいうものは出てこないだろうな。今のロシアも古典的なものを忘れないようにしてもらいたい。日本でも何でも古典が大事です。古典に帰れという。聖書だって古典の最たるものです。

他のものを一切問題にしない。この聖書は全く源泉です、限りない泉です。ドイツの或る経済学者がやはり聖書を横に置いてやっていたという。どういうことをやるにしても、聖書が第一の根源だという自覚のある人は本ものになっていく。その点、夏目漱石は文学としては素晴らしいけれども、やはり最後の押しが足りない。深みが足りない。森鴎外は別な良さがあるけれども。

●百年たって

47また天国は海におろして、各様のものを集むる網のごとし。48充つれば岸にひきあげ、坐して良きものを器に入れ、悪しきものを棄つるなり。49世の終にも斯くあるべし、御使等いでて、義人の中より、悪人を分かちて、50之を火の炉に投げ入るべし。其処にて哀哭・切歯することあらん。

だから、

「良し悪しを、良き麦だの悪しき麦だのを今から詮索しなくたっていい。終りには

どちらが本ものだか分かるぞ、最後には本ものか偽物かが分かるぞ」

とキリストがおっしゃっている。

54己が郷にいたり、会堂にて教え給えば、人々おどろきて言う『この人はこの智慧と此等の能力とを何処より得しぞ。

この人の智慧はどこから来たか、と。みな天から来ている。ケタがちがうので、みなびっくりしてしまった。

55これ木匠の子にあらずや、其の母はマリヤ、其の兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダにあらずや。56又その姉妹も皆われらと共におるに非ずや。然るに此等のすべての事は何処より得しぞ』。57遂に人々かれに躓けり。イエス彼らに言いたもう『預言者はおのが郷、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』

「預言者はおのが郷、おのが家の中では尊ばれない。内輪の人には分からん」

ということ。

58彼らの不信仰によりて、其処にては多くの能力ある業を為し給わざりき。

「人の評価は、その人が棺桶の中に入るまではするな」

という言葉があるけれども、棺桶に入ったってまだダメなんです。それから50年、100年たって本当の評価ができる。

肉体が棺桶に入ろうが何だっていいですよ。魂は天翔けりますから。あなた方も

「死んだ」

なんて人に言わせる必要はない。

「私は天翔けりますから」

と言わなくては。葬式なんてものはくだらない。それくらいの気持で、天翔ける魂である。死なないんだ。

聖書は、キリストも或る意味においては、驚き喜んでくださるような読み方をしないと。聖書の言葉にもこだわったらダメです。

「儀文は殺し、霊は活かす」

とパウロが言ったのはそのことです。パウロや、キリストの旧約聖書の読み方は、ユダヤ人が旧約を読む読み方とはまるで違う。そういう読み方、つかまえ方で読む。聖書は註解なんかいらない。じっと見ていると、眼光紙背に徹するから。神さまの言の奥の言をつかまえてしまう。そういう読み方をしてください。

ゲーテの『ファウスト』だって、いわゆる『ファウスト』の研究家には本当は『ファウスト』は読めていない。ドイツ人よりも却って日本人の方が読める。

私の話は終りはありませんからね。「これで終り」なんていう話はダメです。終りのある話はダメなんです。未完成交響楽が一番いい。それでは今日はそのへんで。